
復讐者の末路

鶴橋ユウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

復讐者の末路

【Nコード】

N5248C

【作者名】

鶴橋ユウ

【あらすじ】

一族の悲願を叶える為に復讐を誓ったガイ。いつか訪れるであろう復讐する日を待ち、屋敷の使用人として忍び込んだ。『復讐するモノ』の続編。 只今全体修正中。詳しくは『聖なる焰の子』の、前書きにて。

誓い／修正完了（前書き）

この作品はテイルズオブジアビスを参考にした二次創作です。

作者の妄想やBL要素が含まれています。

テイルズのイメージが崩れると嫌悪される方、又は同人・BLって何？と意味が分からない、もしくは嫌いな方等は読まない事を勧めます。

以上の事を踏まえて本編をお読み下さいm（――）m

また、この作品は前に書いた『復讐するモノ』の続編となっており、ですので、そちらを読んでから読むことを勧めさせていただきます。

誓い／修正完了

復讐を誓ったんだ

同族の為に

己の為に

『誓い』

夜、皆が寝静まるころ、見張りの目を盗んで長い廊下を音も立てず忍ばせる。

鮮やかな緑色をした廊下。それは、窓から漏れる月光によって、淡い黄色に近い色に照らし出していた。

だが、照らし出された所以外は夜の闇によって、ただ、塗り潰されてる様に混沌が広がるばかり。

そんな暗闇の中、一筋の金が妖しく光り、揺らめく。それは、1つの場所でピタリと動きを止めた。

屋敷の玄関の中央にある柱。高々と一本の刀が青白く輝き、ひっそりと孤独に飾られている。

剣の名を宝刀ガルディオス。唯一父上の形見の品。

手を伸ばしてみるも剣に届くはずもなく、空を切る。

「…父上。」

青い瞳が真っ直ぐと剣を見つめながら、ぼつりと呟く。

思い起こすは美しかった故郷。皆の笑い声に、弾む笑顔。楽しかった記憶。大切な、何にも換えれない自分の居場所。大切な人達。

瞼の闇に映るのは、荒れ果てた大地。一面の、あか。動かなくなつた、冷たい、ひとたち。

相反する思い出。
もう、届かない。

奪われたのだ。

瞬きの間の一振りで。家族、友人、家、将来、居場所…命以外の全てを全部全部ぜんぶ。

アノ男ノ手ニヨッテ

無駄だと分かっているながら、もう一度剣に向け手を仰ぐ。
振り上げた腕。自分の未熟な手が良く見える。それは、大切な人を守るに決めた筈のもの。

いつの間にか血塗れで…もう、後戻りなど出来ない。
知ってしまったのだ。外の世界を。人を殺す感触を。
全ては生きる為。復讐のタメに。

自分の掌と剣を重ね、空気を掴む。
まるで、届かない刀を握り締めるかのようにしっかりと。

「もう…少し…」

静かなる空間に響かせた己の声。
月が雲に覆われ、辺りを闇が支配する。
少年は瞳を閉じ、瞼の裏の黒なのか、はたまた元から存在する黒なのか…何も分からない闇を見る。

今は届く事のない空の掌。
いつかは父上の刀をこの手に掴む事を夢見て、刀との距離を見る。

大丈夫

まだ時間はたっぷりあるのだから

心の中でひっそりと囁く。

焦る必要は無い。

ゆっくりと時間を掛けて信頼を築き上げ、恐怖と後悔を塗り付けてやればいい。

自然と拳に力が入る。逸れることの無い視線。まるで、刀に誓いを乞うかの如く、青い瞳は外れない。

いつか…この刀を握り締め、復讐を果たす為に振りおろす。その日が来るまで『ガイ・セシル』を演じ続けよう。

虚無な空間に誰に見せるでもなく、口の端を歪めてみせる。それは妖しく、闇の中に浮かび上がった。

窓から淡い光が漏れる。それは少年の足下で止まり、少年の姿を映し出す事はなかった。

その様子を楽しそうに眺めると、静かなる闇へと溶けていった。

誓い／修正完了（後書き）

後書きと言つ名の言い訳…。

ここまで読んで下さつてありがとうございます>m(_____)m<
シヨボいですが…実は結構この話し続きます(汗

正面玄関に夜忍び込んで、復讐を誓うガイさんの話でした。

この小説はあまり修正せずに済みました。でも次からどんどん修正する所が増えてくるんですよね…吐血

書くのが遅くてイライラされると思われまω…すみませんm(_____)m
こんなシヨボ作者ですが…出来たら連載の最後まで付き合つて頂けると嬉しいです！

評価・感想を書いて下さると嬉しいです *

長々と失礼しました。ではこの辺で失礼します>m(_____)m<

聖なる焰の子／修正完了（前書き）

余りにも支離滅裂な上に読みづらい為、全体的に修正させて頂きます。又、『重なる歯車 軋むオト』の、ガイの動揺の仕方が、この後書き進めるのに矛盾が生じそうなため、大幅修正させて頂きます。計画性の無い執筆、又遅筆で申し訳ありません。以上、報告でした。

聖なる焰の子／修正完了

鏡に映る

復讐心に満ち溢れた

ガイラルディア・ガラン・ガルディオスの歪んだ顔

瞳を閉じて

もう一度己の顔を見れば

偽りの忠誠を誓った

ガイ・セシルの笑顔が現れた

オハヨウ

ガイ・セシル

オヤスミ

ガイラルディア

『聖なる焰の子』

ファブレ公爵邸の奥の一廓にある、1つの広い部屋。まるで隔離されているかのようにぼつりと孤独に建っている。

鳥がさえずりあう頃、ガイはその部屋を目指し中央にある中庭を横断する。しんとした空間に、自分の足音がやけに響く。

扉の前で足を一度ピタリと止め、小さく息を吐いた。

トントんと音を立てた後に、中に居る憎き息子へと断りを入れる。

直ぐ中から命令口調な子供の声で「入れ」と返って来る。

ガチャリと音を立て扉が開き、目の前に広がったのは血の如く鮮血な朱。開き放れた窓から風がカーテンを揺らし、ついでに朱をなぞる。

子供は、部屋の丁度中央にあるベットに腰掛け、眉間に皺を寄せ難しい顔をしていた。

不機嫌な訳では無い。
気にせずガイ・セシルの仮面を被り、それに声を掛ける。

「お早うございます、ルーク様。御召替えの時間です。」

深く一礼をしてやると、ルークと呼ばれた子供が此方を振り向いた。見た目は8歳の子供。だが、翡翠の瞳には疑惑の念に満ち溢れガイを観察している。暗く覆われた瞳に闇を宿しながらも、光を縋るようにガイへと視線が注がれていた。

瞳を揺らし伏せたのも一瞬の事、直ぐにいつもの人を従わせる主の態度に変える。

「わかった。下がれ。」

「畏まりました。」

ガイはその言葉を聞くと、メイドと入れ代わりに部屋を後にする。年端も行かぬ幼き子がするようなモノではない、氷点下の会話。本能が視察力に優れているのか。聡いルークは、ガイの偽りの忠誠も笑顔も理解していた。

怯える様に引いた一線。

飛び越すでも避けるでも無く、俺は只、冷めた視線で眺めるだけ。交わる事などない、一定距離を保ちながら偽りを築き続けていた。そんな時、ある日俺の気紛れで一度だけルークを助けた事がある。忠誠も言葉も行動も、全てが偽りだった俺。そんな相手の突然の救

い。ルークの顔には『何で?』の一点張り。

困惑した表情でやつが何を考えているのか、手に取るようにわかった。

只の気紛れの行動。

だが、ルークは俺の優しさだと受け止めた様だった。

俺を疑いながらも。

誰よりも愛情を欲し、こんな気紛れの救いなんかに縋り付くなんてそんなに父親の愛情が不足しているのか? 信頼出来る友が欲しいのか?

何て嫌味なヤツなんだろう。

どれも本気で欲せば手に入る。俺にはもう、手に入らないものを持つていくせに。

あいつはそれでも尚欲している。

憎らしい

だが

それを利用するのも、面白いかもしれない

住み込み用の使用人に与えられた屋敷の奥にある一室。ガイは己の部屋に入ると、楽しそうに口元を醜く歪ませた。

自分を殺そうとしている復讐者を信用したい仇の息子。

なんて滑稽な図なんだろうか。

狂ったようにクツリと咽を鳴らしてやると、先客者…ペールが哀しそうに眉をひそめている姿が目端に写った。

「ガイラルディア様…。」

ぼつりと、本当に小さく囁いた俺の名。

「ペール。もうその名で呼ぶなと言っただろ。
何か用か？」

「…いいえ。何でもありません。」

言い終えると深々と一礼をし「あなたの様の望むままに」と呟いた。
わかつている。ペールが何故そんな顔をしているのか。何故俺の名
を読んだのか。

だが…もう遅い。

復讐の歯車は動き出した。誰にも止める事は出来ない。
歯車は狂う事は無いんだ。

E N D

聖なる焰の子／修正完了（後書き）

Noガイアシュ・アシュガイ
yesガイルク・アシュルク

作者はルーク受けに愛を注いでる腐女子です。なので、アッスさんとガイの幼少時代の話しはこれで終わります
早くルークとガイの話を書きたいです！！

復讐心とルークへの想いに悩み苦しむガイさんが好きです♪（えっ

『後書きと言う名の言い訳』

小説って難しいですね（汗）全然書きたい事が書けないですorz
もつとアッスさんへの憎しみとかが書き現したいです（：|；）
言い訳なんですが…まだ小説は全部で六作品しか書き上げた事無い
新米なので、変なトコロなどを指摘して下さいると嬉しいかもです♪

評価・感想お願いします>m(_____)m<

偽りの赤／修正完了

カチャリと

音を立て

音も立てず

赤い鳥は

放たれた

戻って来たのは

純白の鳥

血で汚れ 染められた

紅い鳥

『偽りの赤』

毎日の様に訪れる朝。何ヶ月振りに、それでも何も変わることなく以前と同じ様に子供の部屋を開け放つ。

全ては日常。全ては偽り。

相も変わらず広い部屋。視界を支配する、日常と異なった一つの赤。それはベツトに腰掛け、人が入って来たにも関わらずピクリとも動かない。ただ、ぼんやりと壁を眺めるだけ。

「ルーク様。」

いつもの様にガイ・セシルの仮面を被り、声を掛けるも返事は返ってこない。赤き子は此方を振り向こうともしなかった。聞いた話によると、誘拐されたショックで記憶を、全てを無くし、真っ白な状態で見付かったらしい。

今まで詰め込んできた

知識も教養も

言葉を話す事さえ失い

カラッポな状態で

ガラクタの様に

さらりと音も立てず、赤く、長い髪が垂れ下がる。そのせいで顔も表情もよく見えない。ただ、窺えたのは微かに見える横顔の輪郭。真っ白な空間やけに赤が映えていて、小さな小さな違和感を作り上げた。

ふいに、ふわりと風が赤を撫で、隠れていた翡翠の瞳を曝け出す。怒りも悲しみも悦びも憂いも映し出さない、生気の無い眼。

眉間に皺を寄せていた影など見当たらず、ただ、本当に無表情だった。元々整っていた顔が、余計にそれを引き立たせる。

本当にこれが、あのルークなのか？

覇氣有る瞳は、人を従わせる資質に満ちていた。大人びて見えていたのは、肩に乗り掛かった家柄の重みのせいだろう。

見せ付ける様に勉強に勤しみ高みを目指し、必死だった瞳はもう、そこには無い。

ただ、赤はそこに在るだけ。存在しているのかも危うい様な淡い灯火。虚ろな瞳を持つその姿は、まるで壊れた人形のようなだった。

「ルーク。」

笑顔を繕い、もう一度子供の名を呼ぶ。それは、侮蔑と嘲笑いを含みながら。

何をするでもなく、ルークはただぼんやりと壁を眺め続けている。ガイは赤き子を一瞥した。復讐の為を思えば好都合だが…これからこんなモノの世話を見ないとならないのか。

心の内でそう呟くと、表に表さず小さくため息を洩らした。

全てを偽る為に笑顔は絶やさず、もう一度赤き子供の名前を呼ぶ。

「ルーク。」

真っ白な部屋に赤がぽつり

帰ってきた赤い鳥は

何も語らず動かず羽ばたかず

小さな小さな鳥籠の中

ただ

静かに羽根を休める

小さな小さな鳥籠の中

心を捨てた復讐者と

心が無い偽りの鳥

あまりにも

奇妙な組み合わせ

偽りだらけのこの世界

一つの真実を求める様に

齒車は

カチリと音を立てて
動き出す

刻み行く

歪な二人の物語り

偽りの赤／修正完了（後書き）

遅くなつてすみませんorz

気にくわなくて何度も何度も…×100書き直していたらとんでもなく遅くなつてしまつて（T T（O ドガツ

実は始めの方がまだ気にくわないので、書き直すかもしれないのですが、これ以上遅くなるのはどうかと思い、一応掲載いたします!!
やっどガイルクになりそうですね

前置き長すぎ…orz

どうか見棄てずに最後までお付き合い下さい>m（——（m<

出来たら感想書いて下さるととても嬉しかったり。

以上!!!!!!

重なる齒車 軋むオト／修正中

一番嫌いな色は赤
好きな色は特に無し

嫌いな言葉は変化
好きな言葉は不変

それが「不変」だと信じていた

現実を

壊す様に現れた

1つの赤

『重なる齒車 軋むオト』

「おはようございます、ルーク様。」

あれから何日たったのか、相も変わらずルークはベットの上でぼんやりとしている。

動かない人形の様な子供。だが、そんなルークに少しでも変化が表れた。

それは、音がする方へ耳と目を傾ける様になったのだ。

今も虚ろな瞳で、俺の顔をじっと、静かに見つめている。

ちゃんと認識出来ているのかさえ分からない眼の奥、偽りの笑顔を造った俺の姿が見えた。

コツコツと、ブーツを鳴らしながら窓に近付き、静かにカーテンを開け放つ。

「ルーク様、今日も良い天気ですよ。」

「…。」

返事をする筈が無いと知りながら、口を固く閉ざした子供に話し掛ける。

俺の行動をただただ、目で追う子供。

一体何がしたいのやら。

「ルーク様。」

ピクリと、小さな反応を示す。どうやら子供は『ルーク』が自分の名前だと、本能で認識したらしい。特にその言葉に反応を表す事が多かった。

じっと、見つめ続ける子供の視線。

気のせいだろうか…？

ルークは誰よりも俺を見る事が多い気がする。

あの、憎らしい程純粋な、翡翠の瞳で。

近くにあつた椅子を引き寄せ、ガタリと音を立てて座る。

逸れない視線。

それから逃れる様に窓の外に広がる青を見た。

清々しい程晴れ渡った空は、雲の欠片も見当たらない。

チラリと横目でルークを見ると、俺につられてか、同じ様に空を眺めていた。

一生掴む事の出来ない、自由な世界そらを。

ソレを見て、何を思う？

小さな疑問を口にしようとし、呑み込んだ。
こたえが返ってくる筈が無いのだから。

コンコンつと、不意に部屋の中へノック音が響く。

「ガイ。ルーク様のお食事をお持ちしたんだけど…。」

時計に目を移して見れば、針は12の数字を指そうとしていた。

「ガイ？」

再び響くノック音と共に、返事の無い俺を呼ぶメイドの声。

「ああ…、すぐ取りに行くよ。」

ガタリと椅子から立ち上がり、なるべくメイドに近付かない様にし
ながらルークの元へ食事を持って行く。

その間、やはり子供は俺から目を逸らさなかった。

ルークに食事を与えるのはメイドの仕事。

やっとこの苦痛な時間が終わると思うと清々する。

「じゃあ、俺はこれで失礼させて貰うよ。」

「分かったわ。お疲れ様、ガイ。」

「ああ、ありがとう。」

笑顔で返事をした後、ドアに向けて足を進める。

「うあ…い…。」

「えっ…。」

驚くメイドの声に、聞き慣れ無い喘ぎ声。

振り向くと、子供と目が合った。ジッと、無垢な眼差しを向けてく
る子供。

小さく小さく、口が開く。

「うあ…い…。くわあ…。」

うがぁ…？

…

がぁ…い。」

しんと、静まる部屋の中、目を見張る二人。

今…コイツは何を言った…？

「ルークさま…？ルーク様が…！

奥様っ！ルーク様がつっ！！」

ドタバタと走り去るメイド。

そんな姿とは対象的に、俺はただ、その場に立ち尽くす。

うう…と唸りながら手をばた付かせる子供。

そんなルークの元へとふらり、力無く近付く。

「かぁ…い。

…がぁ、い？」

強い視線が、俺を射ぬく。

子供は…

何を求めている…？

「なんです…か？ルーク様…。」

声は震え、それでも顔には笑顔を貼り付けた。

俺の声を聞くと、子供はピクリと動きを止める。ぼんやりと見つめる間抜けな顔。

それは、すぐに笑顔へと変わった。

にぱっと、口の端を大きく開く笑い方は、幾分か幼く、どこまでも、
純粹な笑顔。

「があゝい、かあゝい。」

嬉しそうに何度も名前を呼ぶ子供。

ルークの小さな手が、俺の服の裾を握る。

憎むべき子供の掌は弱々しく、意図も簡単に振り払えてしまう程の
強さで…。

でも俺は、振り払わなかった。

…否。

振り払えなかった…？

「かあ、い。かあゝい？」

子供は容赦無く、俺を責めたてる。

顔が歪む。ソレが許せず、目を強く瞑り頭を下げた。

「…はい。」

はい…。ルーク様。」

笑顔も、取り繕った声色さえも、見事に崩された。

すぐ側で、子供が喜ぶ様子が伺える。ソレが、俺の苛立ちを募らせ
るとも知らず、ただ無邪気に…。

憎いニクイ…許せない

ナニ…、が？

返事をした後

俺の内で

何かが壊れるオトが

聞こえた気がした…。

重なる歯車 軋むオト／修正中（後書き）

はい…大変更が遅くなりました…orz

言い訳はしません。

ただ、もし毎回読んで下さっている方が居るならば、その方々に心からお詫び申しあげたいと思っています。

本当に申し訳ありませんm(____)m

遅すぎる更新故に、いつそのこと退会を考えております。
まだどうなるか分かりませんが、まずはスランプを脱け出せるように頑張りたいと思っています。

では、また皆様に会える事を祈って…
これにて失礼させて頂きます。

感想＊評価お待ちしております>m(____)m<

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5248c/>

復讐者の末路

2010年12月23日02時34分発行